



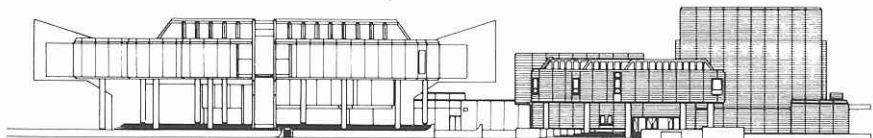
十一面觀音菩薩坐像・藥師如來坐像・大日如來坐像 小坡町・三岳寺

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

16 August 1993

No. 102



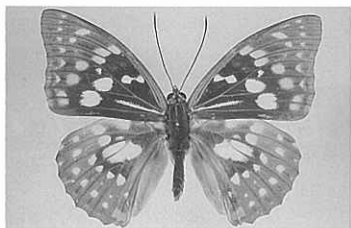
常設展案内

「日本のチョウ」展

日本には何種類のチョウが分布しているかご存じでしょうか。土着種だけで約230種類、南方から飛来したと思われるチョウ(迷チョウといいますが)を含めると、実に300種類近くが記録されているのです。日本と同様の島国で、ほぼ同じ面積を持つイギリスのチョウは約65種類と言いますから、日本のチョウ相がいかに豊かなものであるかをご理解いただけると思います。

しかし、なぜ日本はこんなにチョウの種類が豊富なのでしょうか。今回の日本のチョウ展では、多種類のチョウが住み着くに至った日本のチョウの生い立ちをはじめ、チョウとガの違い、環境とチョウ、そしていま問題になっているチョウの保護など、日本のチョウに関する話題を分かりやすく展示、解説します。また、観覧者の方々のアンケートによる日本の美蝶コンテストも行います。

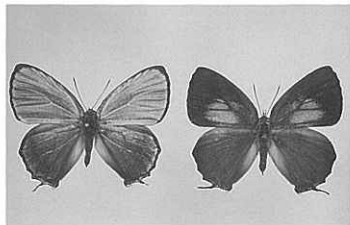
それでは、今回展示するチョウの中から代表的なものをいくつかご紹介します。



国蝶オムラサキのオス(タテハチョウ科) (開長 約8-10cm)

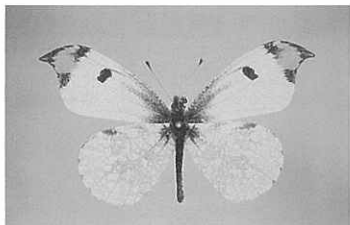
日本の国花は桜、国鳥はキジです。日本人は代表を作るのが好きなので、国蝶も制定しようということになりました。1957年(昭和32年)、いくつかの候補の中から紆余曲折の後、その美麗さから選ばれたのが写真のオムラサキです。オムラサキは幼虫が食べるエノキやエゾエノキ(食樹と言います)と、幼虫の食物となる樹液を出すクヌギなどがある雑木林を生息地としますが、近年、このような雑木林は開発により減少しつつあります。ところで、本種は日本の本土域の広い範

囲に点々と分布しているのに、佐賀、長崎の両県に分布が認められないのは残念なことです。



キリシマミドリシジミ(シジミチョウ科) (開長 約3.5cm)

チョウと言えばお花畑を飛んでいるイメージが強いと思いますが、本種は森林をすみかとするチョウです。オス(写真左側)は、金緑色に輝く美しい羽を持ちますが、メス(写真右側)は黒地に紫色の斑紋があり、個体によってはこれに加えて赤い斑紋を持つものもあります。幼虫は主に常緑カシ類のアカガシを食べるので、佐賀県でもアカガシの生える山地の自然林に生息地があります。しかし、自然林の伐採により、近年生息地は減少しています。



ツマキチョウのオス(シロチョウ科) (開長 約4.5cm)

白くてひらひら飛ぶチョウは、モンシロチョウだけだと思いませんか。ツマキチョウは、平地でも普通に見られ、県立博物館のある佐賀市域内にも多いチョウです。幼虫はアブラナ科のイヌガラシやハタザオなどを食草とします。

(主事 中原正登)

## 常設展案内

## 「夏の輝き—ガラスの涼—」

会期：7月21日(水)～8月29日(日)

冷たいガラスについて水滴、光のゆらめくなんと涼しげなガラス、こんなガラスが工房の熱気のなかから誕生することを知っていますか。

このガラスの製法は、江戸時代から佐賀の名物として知られる磁器の作り方によく似ています。ただし、高温で熔けたガラス玉（ガラスの原料）から形を作り、徐冷窯（じょれいがま）に入れて冷ます（冷たい窯ではなく、実際には500～600℃の熱を加えた状態から徐々に冷ます）、ガラスの製法と、陶石、陶土をこねた冷たい粘土の素地（きじ）から形を作り、窯に置いて徐々に加熱して高温で素地の組成を変え、ごく薄手のものはガラスのように光を透過するという磁器の製法は、素地を熔かす高温の加熱があとさきになりますが、温度はおよそ1,350℃とほぼ同じです。クールなガラスは、いつも熔けた状態でガラス玉を保管する熔解炉、鉄砲バーナー（表面加工、細工用）、徐冷窯とすべての製作工程に常時火力を使うため、素焼窯（すやきがま）、本窯（ほんがま）、上絵付け装飾に数回の錦窯（にしきがま）を使う陶磁器よりも、夏場で4.5倍、冬場で5～6倍の熱量が必要だということです。

佐賀ガラスの創始期は、安政年間（1854～59）と推測されていますが、記録は未発見です。幕末の佐賀藩主鍋島直正公が嘉永5年（1852）にもうけた理科学研究所、精煉方（せいれんかた）で金属、薬学、化学、印刷術、写真術、紡績などとともに、実験用器具や実験用薬品容器の必要からガラスの製造が始まったのです。精煉方といえば反射炉に蒸気船や機関車の模型、アームストロング砲が有名ですが、紡績やガラスが明治の新産業の注目株だったことを知っている人は少ないでしょう。

鍋島藩から鍋島家の経営となり、明治12年（1879）には、青木熊吉、岡部才太郎が工部省品川工作局で洋式硝子製造法を学んで、同14年（1981）の第2回内国勸業博覧会に出品するまでになります。その後、同24年（1891）に、青木、岡部、副島源



一郎の三人で引き継いだ合資会社精煉社は、「ホヤ・ランプ・油入れ・その他」を製造して、海外へ進出した時代もありました。

精煉方のガラスは「宙（ちゅう）吹き」といって、ガラスあるいは金属の管、「竿（さお）」に熔けたガラス玉を巻きとってしゃぼん玉のようにふくらませて製作します。吹くごとに回転して、なめらかで平均した厚さの素地になり、軽くて丈夫なところは、これも薄く軽くしかも丈夫な陶磁器のロクロ細工に似ています。

現在、佐賀硝子の技術を伝えているのは副島源一郎の孫にあたる副島太郎（1948～）の副島硝子工業（株）のみです。「肥前びいどろ」の素朴な美しさが現代的な工芸として人気を集め、この3月には、その伝統的な技術を認められて、現場で働く3人の職人たちが佐賀市の重要無形文化財に指定されたということです。

「夏の輝き—ガラスの涼—」では、佐賀のガラスを創作の基調にして日展や日本新工芸展で活躍するガラス工芸家副島太郎の作品を紹介しています。

（学芸員 宮原香苗）

&lt;写真&gt;「湖水」副島太郎 '90日本ガラス展

「情感と筆触」 8月6日(金)～29日(日)

画家たちが麻布や和紙のうえに描いた「かたち」には、筆先にこめた心情があふれている。鍋島紀雄の日本画、江口良、井手誠一、古川吉重、吉武研司の洋画の中にその心を探ってみよう。

## 調査ノート

## 平成4年度 県内社寺調査 概要報告

## 〈主旨と内容〉

博物館では、平成4年度より3ヶ年の計画で県内の寺院、神社に所蔵される文化財の調査を開始した。

未調査の文化財について保存、研究のための基礎資料を作成することを目的としたもので、仏像、神像、絵画、書、工芸品、古文書などを対象とし、調査の作成、写真撮影を行う。

県内を玄界灘方面、脊振山麓方面、有明海方面の3区にわけ、それぞれ1年間て調査を行い、最終年度に報告書を刊行する予定である。

調査体制は調査委員（外部研究者）、調査員（博物館学芸員）そして市町村文化財担当者の3者が中心となる。

なお実施にあたっては国から補助金（国宝重要文化財等保存整備費）を受けている。

## 〈平成4年度の調査について〉

## ・調査体制と実施の方法

調査の対象が彫刻、絵画など多岐にわたるため、各専門の研究者を委員として委嘱した。また写真撮影については文化財専門のカメラマンを、調査補助員としては専門の教育を受けているものとして九州大学文学部の学生を採用した。

調査は2段階において実施し、所在確認のための1次調査は調査員と市町村文化財担当者の3名程度、調査委員、補助員、カメラマンが参加して詳細な内容調査を行う2次調査は8名程度で行った。対象となる社寺の選定については、1次調査は調査員と市町村文化財担当で協議し、2次調査は1次調査の結果をもとに調査委員を含めた運営会議を開き決定した。

## 主任調査委員

平田 寛（九州大学教授） 仏教美術（絵画）

## 調査委員

菊竹淳一（九州大学助教授） 仏教美術（絵画）

錦織亮介（北九州大学教授） 仏教美術（絵画）

八尋和泉（福岡県立九州歴史資料館 学芸第一課長） 仏教美術（彫刻）  
志佐輝彦（熊本県文化財保護審議委員） 仏教美術（彫刻）  
西村強三（福岡県豊前町嘱託文化財担当） 仏教美術（金工）  
中村 聡（元島田市文化財保護審議委員） 仏教美術（石造物）  
佐伯弘次（九州大学助教授） 文献史学（中世）

## 調査員

竹下正博（佐賀県立博物館） 仏教美術  
福井尚寿（佐賀県立博物館） 近世絵画  
川副義寿（佐賀県立博物館） 文献史学  
写真撮影  
林崎俊男（九州大学技官）

## ・調査区域と対象の社寺

今年度の調査区域は玄界灘方面の西松浦郡、東松浦郡、伊万里市、唐津市、杵島郡の一部の14市町村にまたがり、1次調査は36ヶ所、2次調査は23ヶ所の社寺について調査を行った。

ただし、保存状態の劣化など緊急性のあるものについては、今年度の対象区域外でも調査を行っている。

## ・調査の成果

仏像を中心として重要な資料が多数あらたに確認された。

特に唐津市・夕日観音堂の木造千手観音立像（像高 173.0cm 写真1）は平安時代中期まで遡るものであり、県内の木彫仏としては最古期に属する。福岡県・二丈町の浮岳神社の諸像との類似点も指摘でき、玄界灘沿いの地域に広く仏教文化の交流圏があったことをうかがわせる資料である。

また玄海町・値賀神社の銅造如来形立像（新羅時代）や唐津神社に祀られていた唐津市・大聖院の銅造如来形坐像（像高 46.7cm 写真2 高麗時代）など中国大陸・朝鮮半島との交流を示すものも多くみられ、今年度調査区域である玄界灘臨海地域の特色をみせている。

小城町・三岳寺の木造十一面観音菩薩坐像（像

高 96.0cm)、薬師如来坐像(像高 98.0cm)、大日如来坐像(像高 101.2cm 表紙 鎌倉時代1294年)など制作年をあきらかにしうるものや、相知町・花峰観音堂の石造十一面観音立像(平安時代)、相知町・今山神社の銅造如来形立像(像高 35.0cm 写真3 平安時代)など平安時代としては極めて珍しい材質の作例が確認されている。

仏像以外では、豊臣秀吉の朝鮮出兵に関連すると思われる唐津市・近松寺の足利義昭書状などもあらたに確認されたもので、肥前の文化史においては価値の高いものであろう。

調査した数百点の中から一部をのみ簡単に記述したが、総じて今年度の調査では、歴史的、美術的価値の高い資料が多く確認された。また一部については盗難、虫損など保存上かなり深刻なものもあり、随時所蔵者にたいして説明、指導を行い、ほとんどが改善された。保存・研究のための基礎資料作成という本来の目的に照らし、おおいに成果があがったものと自負している。

次年度は脊振山周辺を調査区域として予定している。脊振山脈は佐賀平野と玄界灘方面をわける長大な山脈で、東西満山と呼ばれた山岳仏教の地として知られており、関連資料が確認されることが期待される。

(学芸員 竹下正博)



写真1



写真2



写真3

## 資料紹介

## 岡田三郎助作《ローマの古橋》

岡田三郎助作《ローマの古橋》(図版1)は、1992(平成4)年度新収蔵品である。

キャンバスボードに油絵具でえがかれ、大きさは縦22.0センチ、横27.0センチ。画面右下に「昭和五年 ロオマニテ 岡田、三、」とあり、この作品が1930年(昭和5)にえがかれたことがわかる。

岡田三郎助(1869～1939)は、この年2月に文部省より欧州出張を命じられ、パリから東欧、バルカン諸国、イタリアを巡遊、11月に帰国した。このときパリにいた大橋了介は、岡田に同行し、のちに当時の旅程を振り返っている。

「カムパニアに大水道の残趾を描きに行かれた時は矢足の筆で日本紙の綴ったのに寫生された。その時足もとに咲いてゐた小さな白い花を摘まれてこれはラファエルが描いた花と同じものだと云はれて紙の間に挟まれた。私も同じような花を探がして先生のされた通りにした。また古橋ノメメントノを郊外行の電車に長いこと乗って描きに行かれた。此の時は繪の具でお描きになった。」(『畫人岡田三郎助』大隅為三、辻永福、昭和17年)  
大橋了介は、この他にも、昭和5年の岡田の関心事を詳細に記録に留めていて、私たちにとても貴重な資料となっている。

この記述のなかで、本作品に関わる事柄は、「古橋ノメメントノ」および「繪の具」という字句であろう。このことについて述べる前に、まず作品について見てみる。

画面そのものは、いかにも現地ですばやくえがかれたという筆触を示し、昭和5年の岡田の油彩画に共通して見られる生気溢れる風景画となっている。そうした中に、傘松や糸杉がえがき分けられ、さらに構図の上においても、石造の橋の水平な線が画面右方へとやや下げられており、もともと左右対称性が強いモチーフに、変化的要素が加えられている。

本作品については、さらに、帰国の翌年1931年(昭和6)9月に東京高島屋画廊で開催された「岡田画師外遊記念小品画展覧会」に出品された20

点のうちのひとつが、本作品と同じ《ロオマの古橋》(縦横寸法不詳、図版2)となっており、それは岩絵具でえがかれているものの、モチーフの点から当館の作品と同系の作品とみることが出来る。この小品展覧会の特色については、後段において触れることになるので、ここでは、この小品画展覧会への出品作の題名には、「ノオメントアナ」という地名が添えられていたということに、注意をむけたい。

ということは、先述した大橋了介の記録にある「古橋ノメメントノ」の記述からみても、そこでえがかれた作品が、ここに紹介する油彩画《ローマの古橋》であったことはほぼ間違いないように思われる。

「すべての道はローマに通じる」といわれた古代ローマの街道は、現在、往時の名を残したままローマからイタリア各地に通じる主要街道になっている。そのうち、北郊へ伸びる街道は国道4号線、サラリア街道である。このサラリア街道はノメントナ(Nomentana)街道によってローマ市街へと通じている。古代のノメントナ橋(ローマの古橋)は、ノメントナ街道がローマ郊外のアニエーネ川を渡る場所に位置している。

この古代のノメントナ橋を岡田は「繪の具」(油絵具)でえがいた。そしてこの後、岡田は、2点の《ローマの古橋》をえがくことになる。1点は、すでに触れたように、帰国後高島屋で開催された小品展覧会に出品された作品である。

この展覧会は、正本直彦が図録の序文において、「光澤なき岩絵具の新畫には古裂の莊飾は誠に相應しきもの」と述べているように、展覧会出品作20点のすべてが岩絵具でえがかれている。さらに「此成畫を莊飾するには在來の洋畫の金ピカの額縁」にかわって、古裂が額縁のいわゆるデコレーション部分に使用されている。それらの古裂は、トルコ、オーストリア、フランス、ベルジャ、中国、日本と岡田が各地において収集した時代裂で

あった。岡田は「自分で色合せから剪裁に至るまで没頭して餘念なく」額縁の仕上げをおこなったという。小品展出品《ローマの古橋》の額縁には、フランス製が使用されている。なお、油彩画《ローマの古橋》の額縁(図版3)も、古裂で装飾されている。こうしたことから判断されるように、昭和5年の東欧諸国の旅は、各地の裂を求めることがひとつの目的であった。

以上の油彩と岩絵具でえがかれた2点の《ローマの古橋》には、あと1点、岩絵具の《ローマの古橋》(図版4)が加わる。縦24.0センチ、横33.0センチで縦横とも油彩画より大きく、やや横長といえる。左下に「岡田 『三郎助』(朱文方印)」(図版5)とみえる。絹本着色。構図は、画面ほぼ中央で截然と対称的に分けられ、静的な印象を強めている。背景あるいは下地は金泥。黄土色の橋、緑青の土手に群青色が混じる。さらにこの群青色は、水面の影となり、水面の光が金泥で表現されている。

構図は小品展出品作に似るが、橋上の樹木の配列などでは、いっそう形式感を強めている。

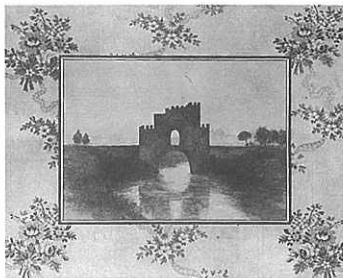
岡田が基底材に絹を使用しはじめるのは昭和初年からであるようだ。1928年(昭和3)2月発行の『美術新論』において、岡田は「私が現在の繪絹應用のキャンバスを、使用し始めたのは、極めて最近であります。」と述べている。このなかで彼は、「地塗り」についても語っている。「先ずアブソルバンのキャンバスを張り、白亜の原料なるブランイスパニオル(blanc d' Espagne 著者注)を膠で解いて、アブソルバンの上に二回ひき、布の目を無くすると同時に、上に張られる繪絹を固着する…(中略)…そうしてその上に泥をひくときは、全體に薄く二三度ひき、その上に繪を描く」のである。

昭和6年制作と見做される岩絵具のこれら2点の《ローマの古橋》は、まさにこうした基盤の上に、正木がいうところの繪画のテクニックと裝飾の上において「東西の融合」が志向された作品といえるであろう。油彩《ローマの古橋》はそうした出立点に位置する作品であった。

(企画普及係長 松本誠一)



図版 1



図版 2



図版 4



図版 3



図版 5

## 行事案内

7月⇒9月

日月火水木金土  
 1 2 3  
 4 5 6 7 8 9 10  
 11 12 13 14 15 16 17  
 18 19 20 21 22 23 24  
 25 26 27 28 29 30 31

日月火水木金土  
 1 2 3 4 5 6 7  
 8 9 10 11 12 13 14  
 15 16 17 18 19 20 21  
 22 23 24 25 26 27 28  
 29 30 31

日月火水木金土  
 1 2 3 4  
 5 6 7 8 9 10 11  
 12 13 14 15 16 17 18  
 19 20 21 22 23 24 25  
 26 27 28 29 30

常 設 展				展 覧 会			
観覧料 大人200(150) 大学生150(100) ※高校生以下は無料、( )内20名以上団体				枠内に明記する以外は無料			
博 物 館				美 術 館			
1号展	2号展	3号展	大 展	1号A展	2号展	3号展	4号展
6/18 自然の動物 7/4	6/18 歴史・民俗の 博物館 7/4	6/18 新収蔵品 7/4	6/18 民俗 7/4	6/18 現代の 版画家 牧野宗則 7/4	6/18 大浮世絵展 大人900(700) 大・高生700(500) 中・小生500(300) ※( )内は前売・団体料金	7/21 8/6 8/29	6/18~7/18 毎日新聞社 7/31~7/31 九州新聞社 7/27~8/1 佐賀新聞社 8/4~8/8 佐賀県教育庁 8/10~8/15 SUS 8/18~8/22 佐賀県書作協会 8/24~8/29 九州新聞社
7/6 自然 日本の蝶 7/6	7/6 歴史・民俗 近世の唐津 7/6	7/9 時代の事と 一書の魅力 7/9	7/9 民俗 看板と広告 7/9	7/21 夏の輝き -ガラスの窓- 8/29	8/6 情感と筆触 8/29	8/29	休 室
第43回 佐賀県美術展 9/11~9/18 佐賀県教育庁文化課 大人200(150) 大学生100(70) ※高校生以下は無料							
9/23 自然 留鳥と渡り鳥 9/23	9/23 佐賀県立博物館 名品撰	10/2 第43回 佐賀県児童生徒理科作品展 9/22~9/25 佐賀県立科展委員会	10/2 民俗 竹の民俗 10/2	第5回 佐賀県高等学校総合文化祭 美術・工芸展 9/22~9/25 県高等学校文化連盟			
				第5回 佐賀県高等学校総合文化祭 書道展 9/28~10/3 県高等学校文化連盟			
				日本近代洋画家の栄華 岡田三郎助展 10/8~11/4 佐賀県立美術館 大人540(410) 大学生250(150) ※高校生以下は無料			

## 日誌

博物館特別講演

「初めて海を渡った人たち」

講師 アンドリュウ・コピング氏

(九州大学大学院博士課程)

日時 6月27日(日) 午後2時より

会場 佐賀県立美術館 画師・研教室

アンドリュウ  
・コピング氏  
(博物館2号  
展示室にて)



佐賀県立美術館所蔵

日本近代洋画名品展

日時 平成5年5月8日~30日

会場 唐津市近代図書館

日本近代洋画  
名作展  
(会場風景)



## 予告

「日本近代洋画家の栄華-岡田三郎助-」展記念講演会

「あやめの夢-岡田三郎助の人物画をめぐって-」

講師 国立西洋美術館長 高階秀爾氏

日時 10月11日(休日) 午後2時より

佐賀県立博物館・美術館報 第102号

平成5年8月16日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市城内1-15-23 電話0952-24-3947 0952-25-7006

印刷 株式会社日之出印刷